

# 社会科

## における深い学びに到達した児童像

柱① 情報の分析	柱② 考えの形成 ・再構築	柱③ 既習・新知識 の活用	柱④ 課題発見
<b>深い学びポイントとの関連</b>			
3自力 4協働	3自力 4協働 5練り上げ	2見通す 3自力 4協働 5練り上げ	1つかむ 2見通す 6メタ認知
◇資料から問題解決に必要な情報を見極めて読み取り、読み取ったことに対する自分なりの考えを表現することができる。 ◇資料から読み取ったことを特徴や傾向、相互の関係に注目して整理・分析ができる。	◇自分と友達の考えの共通点や相違点に気が付き、互いのよさを認め合いながら社会的事象に対する自分の考えを再構築することができる。 ◇自身の経験・体験や既習事項を基にしながら、社会的事象とどのように関わっていくか適切に判断し、表現している。	◇資料や調べて分かったことを根拠にして対話しながら、課題解決に必要な情報の選択（情報の整理・分析）ができる。 ◇学んだことを日常生活や他教科の中で生かして学んでいる。	◇自分の課題や学びの進み具合を意識しながら次時の課題への見通しをもつことができる。 ◇社会的事象を自分事として捉え、学習問題について必要感をもって主体的に調べている。

### 児童像の実現のために効果的だった手立て

#### 【学びの自律化・個別最適化】

- ◇ 学びシートによる目標・ゴールや達成度の可視化・共有化
- ◇ 活用・保存・修正をしやすいするための資料の電子化
- ◇ 場の設定や資料の厳選（教科書・本・Webサイト）による学び方の複線化

#### 【学びの自律化】

- ◇ 自分の視点や立場を明確にしたり、互いの考えを積極的に比較・検討したりするための話合いの設定（順位付け等）
- ◇ 思考ツールや付箋を活用した情報の整理・分析をする時間の設定

#### 【個別最適化】

- ◇ クラウド上やノートの既習事項を根拠にした考えの構築・対話の機会充実
- ◇ 思考ツール（座標軸・ピラミッドチャート等）を活用した自分と友達の考えの比較
- ◇ クラウドを活用した調べ学習やまとめる活動

#### 【探究化】

- ◇ クラウドを活用した個々の学習問題や各種資料の共有
- ◇ 児童が目標やゴールをつかむためのモデル学習（モデルデータの作成）の実施

### 【その他】

- ◇ パワーポイントや Web サイトのサービス（マップ・動画など）を利用した導入の工夫
- ◇ 身の回りの生活に隠れている社会的な意味に気付くことができるような、提示資料の工夫
- ◇ 考える視点・立場を明確にした話し合い活動の設定
- ◇ 社会的事象の相互関係を捉えるための情報の収集・分析方法の工夫（思考ツールの利用や  
相関図の作成など）
- ◇ 意図的なグループ編成による活動の深化・活性化

### 実践の成果(○)と課題(▲)

- 導入の資料を工夫することで、「もっと調べてみたい」「もっと考えてみたい」という児童の関心・意欲を高め、社会的事象を自分事として考えるきっかけを作ることができた。
- 学びシートでめあてや目標を共有することで、児童が見通しをもって活動したり、自身の学び方を調整したりすることにつながった。
- 単元計画を工夫してモデル学習を実施することで、児童が自ら学習問題を発見したり、課題解決のための見通しをもったりすることができた。
- 調べる資料として教科書・図書館の本・Web サイトを厳選して用意することで、児童一人ひとりが学習問題について必要に応じて資料を使い分けながら、主体的に学習を進めることができた。
- 思考ツールを使うだけで終わらせることがないよう、思考ツールによって何を考えさせるのか、どんな力を身に付けさせたいのか、しっかり計画を立てた上で実践することができた。
- 思考ツール（座標軸やピラミッドチャート）の活用によって、個々の児童が調べた膨大なデータを、限られた時間の中で対話しながら整理・分析することができた。
- 順位付けやパワーポイントの編集、レポートづくり、立場を明確にした話し合い活動など、まとめたり生かしたりする活動を工夫することで社会的事象に対する既習事項や自分の意見・考えを再構築しながら明確にしてアウトプットし、自身の思考・判断を詳しく表現することができた。
- ▲ 単元の学習問題を立てるための資料の選出や提示、話し合いのもって行き方にまだまだ検討の余地があり、単元の序盤から社会的事象にかかわる問題を自分事としてとらえさせるのが難しかった。  
⇒ 5W1H などを利用した「問題発見」のための視点の提示や、単元の導入に際した資料の工夫
- ▲ ICT機器の使用法が多様化・複雑化してきており、使用のためのスキルを身に付けるには社会科の時間だけでは不十分であった。  
⇒ クラウドの活用に必要なスキルは、例えば「付箋を視点に合わせて貼る」「表に必要な情報を書き込む」「説明のために必要な写真を提示する」などの基本的なスキルの応用であると考え、中学年までは身体的な活動も伴いながら学び、高学年でデジタル化していくような併用型の学習を進めていく。  
⇒ 社会科グループとしては、ソフトウェアは office 3 6 5 の汎用ツールで問題はないと考え

るが、他教科や他学年と連携を図り、力を合わせて ICT 活用スキルを身に付けさせていく必要がある。場合によっては、学校として活用していくソフトウェアを決めて進めてく方法も考えられる (Canva や Class Notebook など)。

▲ 意見が偏った際などの協働やまとめの場面では、深い学びへと繋げるための展開の仕方として、全体交流をどのように位置付けるか、どんな話し合いを展開するか、全体交流の時間は必要なのか、など全体交流のさせ方にも留意する必要がある。

⇒意図的な指名による多面的・多角的な視点の確認、個別の活動中に全体で意見交流することによる目標の再確認、「自分と違う人」「なるほどと思った人」などお互いの考えの共通点・相違点を意識しての振り返りなど、交流の目的や意図に合わせた発問の工夫が大切である。